勅撰八代集の「題しらず」歌をめぐって

山之内　恵子

はじめに

歌題や作歌事情が不明の際に付す「題しらず」という成句は、撰者を主体と考えた「題を知らず」かあるいは歌を優先した「題知られず」の意に理解するか等疑問の残るところであり、「題しらず」の「題」とは、いうまでもなく歌題を示すものであるとすれば、勅撰集中の「題しらず」歌は部類に分類することは原則的には不可能だということになる。

また、一方では、「仁和御集」や「斎宮女御集」の私家集に「折しらず」という成句が見受けられる。歌材(題)不明の「題しらず」に対して、詠作事情不明の「折しらず」という分類は妥当だと思われる。

しかし、詞書記載の際にこれらの区別がしだいに困難となり、漠然とこれらを総括してしまう「題しらず」を記すことになったものと思われる。

詞書とは、その和歌の解釈と、鑑賞に一つの示唆を与えるものであるとするならば、詳細で具体的な詞書に対して単に「題しらず」と付す和歌にはどのような意味が投げかけられているのだろうか。いわゆる歌の成立事情を詳細に記す一般的な詞書とどう区別されて編纂されたのだろうか、そしてそれは文学的にどんな効果が内包されているのだろうか、そのような「題しらず」歌にいくつかの疑問を持ったので、勅撰八代和歌集の「題しらず」歌の変遷を追いながら、特にここ数年来テーマとしている後拾遺集や、その後の金葉、詞花、千載、新古今集を中心に考察してゆきたいと思う。歌の成立事情を語る一般的な詞書と、「題しらず」を比較する際、どうしても編者の意図的な介入を認めざるを得ないのが「題しらず」歌である。つまり、詠まれた時や場などなどを語る一般的な詞書にもこのことは言い得るだろうが、私が本稿で問題としたいのは、成立事情が明確に受けとめられた歌にもかかわらず「題しらず」としたことである。

まず、表Ⅰに示すように「題しらず」歌の実態を把握するために八代集中の「題しらず」歌数を抽出した。そして、その歌の出典等よりその性格などを和歌史の流れの中で捉えてゆくことにしよう。

以下、使用した本文は次のとおりである。また、「題しらず」という詞書が二首以上続く場合は、その詞書を省略したものと考えて、「題しらず」歌として扱った。

1　古今集　朝日古典全書「古今和歌集」、西下、滝沢編「古今集総索引」(明治書院)
2　後撰集　「後撰和歌集総索引」(大阪女子大学編)
3　拾遺集　片桐洋一「拾遺和歌集の研究」
4　後拾遺集　糸井、渡辺編「後拾遺和歌集総索引」
5　金葉集　増田他編「金葉和歌集総索引」
6　詞花集　井上宗雄校注「詞花和歌集」(笠間叢書)
7　千載集　久保田、松野校注「千載和歌集」、滝沢貞夫編「千載集総索引」
8　新古今集　日本古典文学大系「新古今和歌集」、「新古今集総

表Ⅰ　〈勅撰八代集における「題しらず」歌入集歌数表〉

勅撰集名	1、古今集		2、後撰集		3、拾遺集		4、後拾遺集		5、金葉集		6、詞花集		7、千載集		8、新古今集	
巻名	22	春上	16	春上	32	春	29	春上	0	春	9	春	7	春上	23	春上
春上	21	春中	7	夏	20	夏	7	春下	6	夏	11	夏	0	春下	18	春下
春下	14	春下	14	秋	33	秋	11	夏	6	秋	16	秋	13	夏	32	夏
夏	39	夏	34	冬	18	冬	20	秋上	4	冬	9	冬	17	秋上	56	秋上
秋上	15	秋上	24	賀	3	賀	3	秋下	1	賀	1	賀	11	秋下	37	秋下
秋下	10	秋中	20	別	14	別	8	冬	0	別離	0	別	8	冬	53	冬
冬	4	秋下	59	物名	0	賀	2	賀	7	恋上	16	恋上	0	離別	6	賀
賀	6	冬	49	雑上	15	別	1	別	12	恋下	7	恋下	1	羇旅	5	哀傷
羇旅	3	恋一	21	下	7	羇旅	15	羇旅	3	雑上	11	雑上	0	哀傷	6	離別
幼名	0	恋二	17	神祇	2	哀傷	8	哀傷	0	雑下	4	雑下	0	賀	18	羇旅
恋一	79	恋三	16	恋一	49	恋一	11	恋一					25	恋一	41	恋一
恋二	44	恋四	6	恋二	57	恋二	36	恋二					30	恋二	11	恋二
恋三	50	恋五	12	恋三	49	恋三	5	恋三					13	恋三	37	恋三
恋四	58	恋六	10	恋四	60	恋四	2	恋四					14	恋四	23	恋四
恋五	70	雑一	0	恋五	64	恋五	2	雑一					19	恋五	65	恋五
哀傷	2	雑二	8		18	雑二	1	雑二					9	雑上	30	雅上
雑上	28	雑三	9	雑春	22	雑三	5	雑三					9	雑中	29	雑中
雑下	33	雑四	15	雑秋	8	雑四	1	雑四					13	雑下	52	雑下
雑躰	55	別・旅	2 1	雑賀	24	雑五	5	雑五					0	釈教	2	神祇
大歌所	0	哀傷	2	哀傷	8	雑六	0	雑六					0	神祇	1	釈教
計	553		342		503		172		39		84		189		545	

1　三代集の「題しらず」歌

古今集のおよそ半数を占める「題しらず」歌は、そのほとんどが「題しらず、読み人しらず」であり、古歌の伝誦、愛誦されたもので、どちらかと言えば万葉振りの歌風を持つ歌が多い。この古今集にいう「題しらず、よみ人しらず」は、寛永一五年（一六三八）刊、宗祇の「古今和歌集両度聞書」に「題しらずといふ事は当座の景気にのぞみてよめる事も有、又会所の斟酌などによる事もあり。又題あれども心あらはれざればいへる事も有。定まらぬ事なり。よみ人しらず　あるは勅勘の人、あるは貴人、あるはふるき世の人、又実に名をしらねば、かける事もあるべし。」とあり、読まれた席の事情、条件、情勢などを考え合せて適当に処置したこともあったらしい。また原資料に題があっても、その心が明らかでない場合なども「題しらず」とするなど、定まった法則性はなかったようである。

この後の飛鳥井雅俊の「古今栄雅抄」（延宝二年（一六一四））に

も、「題しらず」について「誠にしらぬもあり。拾遺には。当集に、おなじ。よみ人しらず。これも誠にしらぬもあり。高位の人をばかくしてかゝず。下位の人をば名をあらはさず。当集いづれの所もかくのごとし」とある。

しかし、いうまでもなく、古今集は律令制度下に君臣という公的な場で奏覧された勅撰第一集であり、そこにはおのずと入集する歌の詞書や歌に関して明確な規範を持っているものと思われる。

そこで、少し具体的に古今集中の「題しらず」をみてみよう。先述したが、古今集の「題しらず」歌はそのほとんどが「読み人しらず」であるが、問題となるのは、若干の作者名の記された「題しらず」である。作者名があってなお「題しらず」と記した場合には、どのような事情がそこにあったのかである。

これらのように歌人の判明する「題しらず」歌は、一見しても明確なように、四季歌には十三首と少なく、その大半を恋歌に見い出せる点である。ちなみにその数は、四季歌の約一三倍を越えている。このように、古今集の恋歌には詞書のある歌が極めて少ないのである。これはどういう理由によるものなのだろうか。

また、この作者とはどんな人々であろうか。入集の多い歌人を順に掲げると、貫之、躬恒、友則、忠岑等、古今集撰者達である。彼らの「題しらず」歌は、いずれもその典拠となった私家集に具体的な詞書があるにもかかわらず、なぜそれらを削除して、入集したのであろうか。この点について、例えば貫之の恋部に入集した歌を、詞書のついた歌と、「題しらず」歌に分けてみると、詞書の付された歌は、一見叙景歌的な歌が多く、極めて平凡な詞書を記している。その反面、「題しらず」歌は、典拠となった私家集などから推測すると、貫之の恋の思いが露骨に表出されたような歌は概して、「題しらず」である。他の歌人についても同様なことがいえる。

つまり、古今集の撰者である貫之は、恋歌的な事情の歌を意識的に省略して撰集したということがいえる。いいかえれば貫之は恋歌に四季歌のような詳細な事情を記述せず、できるだけ省略しようとした意図で撰集に臨んだのではないかと思わせるふしがある。勅撰第一集として、公の眼に触れる晴れの歌集からは、撰者としての品位と栄誉を守るために詞書を厳密に検討し、それにふさわしくないとする歌からはあえてそれを削除するという姿勢で編纂に当ったものであるといえよう。

角度を変えてみるならば、資料となった家集にあった詞書すら省いているというのは、撰者達は恋歌について詠まれた事情や、場などよりは、和歌、作者に重点を置いて編纂したということになろう。古今集の序にいう、和歌の芸術性を追求しようとした姿勢をこの「題しらず」がもの語っているとも言えるのではなかろうか。

次の後撰集では、一目して前の古今集とは詞書記述の傾向も全く異なっている。後撰集の特色としてよく言われるようにそれは贈答歌で占められている点や、詞書に対人語が多く使用されていることから、一つの歌物語的要素の濃い歌集であると言われている。

後撰集の「題しらず」歌は三四二例、古今集と比らべるとその数値がかなり減少していることに注目される。これらの歌のうち、作者名のあるもの四七、よみ人しらず四二、それに勅撰集中の作者表記中他に類を見ない「題よみ人も」という記述の歌が五〇首もある。

後撰集の読み人しらずに「題しらず」が少ないのは、換言すれば詠作事情に関しては、明確な歌が多いといえるのではなかろうか。つまり、後撰集編者は歌よりも詞書を主に撰歌したとも言いうるであろうか、すると「題しらず」という歌は逆に何らかの意図があったとも思えるのである。

先の古今集で述べたように、四季歌に少なく、恋歌に多く入集する「題しらず」歌は、後撰集ではその数が逆転する。このことは、後撰集の撰者が恋歌に関してはできるかぎり詠歌事情の不明な「題しらず」をさけ、歌われた場や事情をむしろ積極的にとり入れて編纂しようとした点が指摘できるだろう。この現象として、本集入集の「よみ人しらず」歌は、本来古今集などの比較的古い歌で詠歌事情の伝わらない不明歌という意味の「題しらず」とは異り、詳細

な詞書を付している。これは、後撰集が打聞により採集した歌であるという点と、「散佚物語集」のようなものを想定する場合とがあるらしい。[註1]

前述したように、古今集の秀歌として採択した撰集意図と比べて、後撰集は「歌」よりは、もろもろの詠歌事情を示す詞書の方に重きを置いたのであろう。この点は、この期成立の伊勢物語、大和物語等の物語文学の影響なども考えあわせられるだろうか。

複雑な成立事情を持つ拾遺集は、古今、後撰、拾遺集と三集を一まとめにして三代集と呼んでいる。拾遺集の「題しらず」歌は、総数五〇三首にも及ぶ。拾遺集入集の歌人が、古今や後撰集の代表的な歌人を重んじ占められている点と符号し、「題しらず」歌の記名作者も同様なことが言える。

ではすこし具体的に拾遺集の「題しらず」歌をみてみよう。

189 190（秋）の二首は、大中臣能宣の、

もみじせぬときはの山はふくかぜのおとにや秋をきゝわたるらん

紅葉せぬときはの山にすむ鹿はおのれ鳴きてや秋を知るらむ

だが、どちらも非常に明解な歌で、声調の流麗さとあいまって人々に伝承されていく性格の歌であったと見ることができ、このような歌の場合に、撰者は「題しらず」と記述したのであろうか。

また、224（冬）は貫之の歌、

思ひかね妹がりゆけば冬の夜の川風寒み千鳥鳴くなり

であるが、「貫之集」では「承平六年春、左衛門督殿屏風の歌、冬」にと詞書された屏風歌であることがわかる。だが、あえて屏風歌であることを記さずにも屏風歌を離れての一首の味わいのある歌であり、伝誦されるに至ったものと思われる。このように、拾遺集には多くの屏風歌を入集するが、これらの歌のような場合も多かったと言えるのである。249（冬）の忠見の詠歌などの場合も同様であろう。

2　後拾遺～新古今の「題しらず」歌

歌の成立事情をできるだけ具体的に記述しようとした傾向の強い後拾遺集では、前の三代集と比較すると、「題しらず」は減少している。ここに示される撰者の編纂意図から考え合せると、詳細でかつ公的な記述を意識した詞書の中での「題しらず」は何らかの意味を持っているように思える。先に発表した拙稿[註2]にも触れたが、例えばそれは源道済のように家集に詳細な詞書があるにもかかわらずあえて「題しらず」と付す場合、また元真歌のように歌合詠出歌、撰外歌と区別する意味で使われた場合などである。

また、この他にも、出典調査によると、兼盛の「題しらず」歌である228（夏）、656（恋一）は、いずれも天徳四年内裏歌合での詠でありながら、詞書にはこれを記さずに「題しらず」とする。兼盛の歌は、本集には十八首入集するがその中でも兼盛歌には屏風歌が多い。一般的に屏風歌は出典不明として「題しらず」とする場合があるが、「天徳四年内裏歌合」での詠を「題しらず」としたのは、証本の参照ができなかったためか、あるいは歌集から採集したためか、はっきりしない。この「天徳四年内裏歌合」からの採集歌には種々の問題があるようだ。拙稿で述べたが、同じ「題しらず」歌を七首も入集する藤原元真も恋四（807 808）に二首の本歌合歌を並べて入集するが、選外歌であった808歌を「題しらず」とする。両者を区別する意味でこの「題しらず」を記述したようである。あるいは、この歌合に関しては何かもっと別な事情があったのかも知れない。

また、次のような場合もある。巻二十俳諧歌、1203の実方の、

題しらず

まだ散らぬ花もやあると尋ね見むあなかましばし風に知らすな

は、「実方朝臣集」には見えないが、「小大君集」（書陵部蔵）に、

又、道信の君、実方君に、三月中十日ほと

散りのこるはなはありやとうちむれてみやまかくれをたつねてし

かな

御返し

またちらぬはなもやあるとたつねみんあなかましはしかせにしらすな

とあり、また「道信朝臣集」にも、

三月つこもりのひ、小一條中将のもとに

ちりのこる花もやあるとうちむれてみやまかくれをたつねてしかな

とあって、後拾遺集入集の1203歌が、道信と実方の間でやりとりされた歌の一方であることがわかるのである。詠歌事情については、他集より積極的な姿勢で臨もうとしていた後拾遺集であったのに、このようなかなり詳細な詞書を有していた「小大君集」があったにもかかわらず、どうして「題しらず」としたのだろうか。

問題とするこの歌は、源道済の歌（1202）の「題しらず」に続く歌だが、この道済歌も典拠となった資料は明確でない。後拾遺集の最終巻に誹諧歌配置は革新的でもあり、これにこのような実方の歌に、作家事情一切を省いて「題しらず」として撰入したのは、勅撰集中初めて独立した誹諧歌の部立の設置という文学的な試みに対しての撰者通俊の意識的な顕れでもあろうかとも思われる。また、「八代集抄」には本歌に注して「あなかしがましは、あらかしまし音なせそ。花有ともてさわがば、うき風もや尋みんとや」とあり、「あなかしがまし」に注目しての入集ということになったのではないだろうか。この「あなかしがまし」という句は、古今集、巻十九、雑躰、誹諧歌1016の僧正遍昭の歌に、

題しらず

秋の野になまめき立てる女郎花あなかしがまし花もひと時

とあり、「あなかしがまし」の句に作者の鋭い主観を感じさせ、歌われた内容も花のあわれさよりも誹諧歌特有の滑稽さを感じさせている。古今集の撰者達が、この遍昭の歌を四季歌としてではなく、「あなかしがまし」に注目して誹諧歌として入集させたのは、僧侶として世の中の実際を客観的に表現しようとしたところにあるのではないだろうか。すると、後拾遺集の実方「題しらず」歌の背景には古今集の、この遍昭歌が念頭にあって、撰者通俊もこの歌のことは充分こころ得ていたので、誹諧歌として入集させるに当って何の疑問もなく、「題しらず」という形をとっての入集ということになったとも考えられるだろう。こんなところにも、古今集をかなり意識していた撰者の姿勢をのぞかせているようだ。この古今集志向は、随所に見受けられる。たとえばそれは、「題しらず」歌の分布状況に置いてだが、恋巻の最終巻である恋四に最も多くの「題しらず」歌を入集している点などがそれある。

また、本集に二十首を入集する長能は、このうちの六首（160 289 306 713 797 818）を「題しらず」歌とする。306（秋上）は花山院の主催した歌合中で読まれた歌だが、本集入集の323 338は共にこの歌会の詠として、「花山院歌合せさせ給はむとしけるに、とどまり侍りにけれど、歌をば奉りけるに、秋風をよめる」、「花山院歌よませ給ひけるによみ侍りける」という詞書を付して撰入する。しかし306は、「題しらず」であり、同じ歌会歌でありながらどうして306のみを区別しているのだろうか。また、160（春下）、289（秋上）も共に「人の屏風の料」、「（中宮御屏風に）萩」と詞書がある。このように長能の「題しらず」歌に限ってみても、統一制の乱れや、意識的な削除が見られるのである。後拾遺集は、一般的に詳細な詞書に特色を有するのだが、一方では先述のような錯綜が随所にみられ、単なる記述の誤まりなのか、疑問とするところである。あるいは配列上の撰者の意図なのかは、不明である。

後拾遺集に続く次の金葉集では、「題しらず」歌は四八首、うちよみ人しらず歌九、作者名のあるもの三九首となる。恋下、巻末（489～503）に十五首まとまった形で「題読人不知」とする一群がある。この一群については、後に述べるとして、記名作者のうち三宮が十首の「題しらず」歌を入集する。三宮は、後三条天皇の第三子、輔仁親王で金葉集以下千載集五首（177 308 645 1100 1182）、新古今集一首（70）、

続後拾遺集（1040）、新千載集（351）にそれぞれ詠歌を入集するが、千載集1100、新千載集の歌を除くすべてが「題しらず」とする。輔仁親王の歌は、典拠となった資料は不明で、「題しらず」とした理由はよくわからない。ただ輔仁親王の歌は詩文などを参照した歌が多く、あえて詞書を必要としなかったということが言えるかも知れない。

次に先述したように巻八、恋下の巻末、十五首の「題読人不知」である。この十五首は、詞の面白さを読んだもの（523 524）や、歌の中に芥川（525）、たかしま（526）、かさとりのやま（527）、みくま（528）などの地名を詠み入れた歌、また、歌の内容はそれほど複雑でなくことばのあそびや言いまわしに面白みのある歌が並んでいる。十五首の終わり近くに、

538かしがまし山の下ゆくさゞれ水あなかまわれも思ふ心あり
539ぬす人といふもことわりさよ中に君が心をとりにきたれば
540はなうるしこやぬる人のなかりけるあなはらぐろのきみが心や

とある。538は、恋人に何やかやと言われて、ああやかましいと嘆いた歌であろうか。539は盗人というのもそのとおりだ、夜中にあなたの心を取りに来たのだから、540は、花うるしを是れや塗る人が無かったのか、寝た人は無いと言うが、といった歌に滑稽さやおかしみをねらったどちらかと言うと誹諧歌的な要素を認めることができる。

以上のように、十五首まとまった形で「題読人不知」とした歌には、独得な要素を認めることができた。後拾遺集で初めて独立して誹諧歌の巻を置いた前例に習って、恋下の巻末にこのような配置をしたのは注目させられる。金葉集「題しらず」歌について気付いた二つの点について簡単に述べた。

次の詞花集では八五首の「題しらず」歌を入集する。このうちよみ人しらずは八首（371は、西行無名時代の作でよみ人しらずとして入集している）、作者表記のある歌七七首に分けられる。これらの作者のうち好忠が十五首、和泉式部四、道命三首を入集する。かなり多くの好忠「題しらず」歌を入集するわけだが、好忠は、本集に十七首入集するが、二首を除く十五首が、「題しらず」歌で占めている。好忠入集歌の典拠となった好忠集や毎月集には、「正月はじめ、五月中」などという歌の時間を示す詞書や単に題を記した詞書が付され、勅撰集入集の際は、これらの詞書はあえて特記すべきこともなかったのであり、また好忠の歌は、後拾遺集以降の勅撰集ではすべて「題しらず」として入集させている例にならって撰者は撰入させたのであろう。

概観するに詞花集の「題しらず」歌は、ほとんどに私家集や私撰集（後葉集）に出典を求められるが、そのいずれも省略してもそれほど問題とならない歌の場合に「題しらず」としたことが言えるだろう。詞花集が三代集と新古今集の過度的な様相をますものという捉え方をすれば、詞花集の「題しらず」歌にはそれほど作意的な部分は見受けられないように思えるのである。

撰集当時、かなりの批判を受けた詞花集の後に編まれた千載集には、一一五首の「題しらず」歌が入集するが、そのうちよみ人しらずとするものはわずかに四首である。ただし、この四首も245（秋上）、667（恋一）は出典から経正、667は経盛の歌と判明する。この二人のように隠名で入集した歌人もある。残り二首が作者不詳ということだが、この二首（325、1122）もそれぞれに蓮阿、崇徳院の歌らしいとするので、千載集の「題しらず」歌には実質的にはすべてに作者名があるものということができよう。

本集の「題しらず」歌は、ほとんどに典拠となった私家集や続詞花集などの私撰集、歌合などが示される。その「題しらず」歌のうち、719（恋二）は実家の歌だが、典拠となったと思われる「実家卿集」には、「しらかはのかりんゑにてうたあはせしはべりしに人のかはりてこひのこころを」とあり、また919（恋五）も同じ実家の歌で、これにも「林下集」恋に「白河の歌よみども歌合し侍りしに、人にかはりて」と作歌事情が述べられるにもかかわらず、本集では両者とも「題しらず」として入集する。先に引いた「実家卿集」詞書の「しらかはのかりんゑにてうたあはせしはべりし」とは、「平安朝歌合大成」七によると、仁安二年（一一六七）俊恵歌林苑歌合

での詠とする。これらの歌の他、883（恋四、俊恵法師）、884（恋四、殷富門院大輔）もこの歌会での歌とされるが、883には「歌会し侍りける時、恋の歌とて詠み侍ける」と詞書されている。すべてを削除して「題しらず」とする時と、単に「歌合し侍りける」と歌林苑の表記を欠く場合など、どうして同じ歌合歌でありながら区別されたであろうか。この背景は不明である。千載集の場合は、私的な歌合、歌会詠はほとんど「題しらず」として撰入し、また、私家集などに付された簡単な題は省いたり、特記するに価しないと判断されたものはみな「題しらず」としたようである。が、一方ではこの記載も不統一さが目立ち編集資料の問題等もありそうだ。

一四六首の「題しらず」歌を数える新古今集では、そのおおよそは、私的な詠歌（好忠）である場合、または私会、私の百首である場合が多いようである。これは、公的な場をことに意識してこれを「題しらず」としたようだが、なかには、作意的なものや、「題しらず」とするには疑問のある歌もある。

440（秋下）は、俊恵法師の

嵐吹く真葛が原に鳴く鹿は恨みてのみや妻を恋ふらむ

は、「太公太后宮亮平経盛朝臣家歌合」（仁安二年1167八月）で鹿を題とした十二番、左の歌である。また彼の家集である「林葉和歌集」秋にも「経盛卿家歌合、鹿」と詞書がある。このような詞書を省き、新古今集ではどうして「題しらず」としたのだろうか。久保田淳氏も「新古今和歌集評釈」のなかで、本歌の「題しらず」について「経盛という動乱に直接関わった平家の人々の名を撰者が公的な場に表わすことを控えたと見る」と述べられるように、公的な場を意識しての排除であろうと考えられる。これと同じ例として、824（哀傷歌）は大江匡衡の

夜もすがら昔のことを見つるかな語るやうつゝありし世や夢

である。この歌の背景には、「続詞花集」の「一条院かくれさせ給ひてほどへて、夢に見たてまつりてよみ侍りける」という詞書があって、この歌が哀傷歌として撰入された事情は、先の詞書なしでは考えられず、どうして続詞花集の記載を除いたのであろうか。一条院に対し匡衡の馴れすぎな態度が撰集の際問題となって、あえてこの事情を「題しらず」と記述することで、歌だけから詠み取れる雑歌的な部分と分けたとも考えられようか。

また、次のような場合もある。105（春下）、851（哀傷歌）は、業平の

花にあかぬ歎きはいつもせしかどもけふのこよひに似る時はなし

白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消なましものを

という歌だが、105は「伊勢物語」第二九段、851は六段（芥川の段）にそれぞれ載った有名な歌である。当時からこの両歌は「伊勢物語」の歌として、世に知られており、具体的な詠歌事情を記すまでもないものという意味で、「題しらず」としたものと思える。

新古今集の「題しらず」歌には、確かに、その歌の詠歌事情を知ることのできない場合もあるが、全般的には公的な表記という面を重視し、それに不都合な詞書は除去するという傾向があること、同時にそれは読む側を充分意識しての作意が感じ取れることである。また、題はわかっていても、特記すべきほどのこともない時には、「題しらず」とする。著名歌人の場合にそれが多いようであり、歌独自で文学的な評価を得る歌に多くが見受けられるようである。

3　いくつかの問題

前述した八代集の変遷を考察していくうちにいくつかの問題に気づいたので、次に簡単に触れておき、その詳細は稿を改めたい。

八代集の「題しらず」歌には巻頭に位置しているものが多い。巻名と作者を以下に記すと次のようになる。

古今集　恋一（よみ人しらず）、恋二（少町）、恋四（よみ人しらず）、雑上（よみ人しらず）、下（よみ人しらず）、雑躰（よみ人しらず）

後撰集　夏（よみ人しらず）、秋下（よみ人しらず）、冬（よみ人しらず）、恋五（業平）

拾遺集　恋二（よみ人しらず）、恋三（よみ人しらず）、恋四（人麿）、雑春（躬恒）、雑恋（人麿）

後拾遺集　雑一 為政、誹諧歌 よみ人しらず
金葉集　なし
詞花集　秋 好忠、冬 好忠
千載集　秋下 大弐三位、羇旅 範永、恋三 実方、恋四 和泉式部、恋五 相模
新古今集　夏 持統天皇、秋上 家時、哀傷歌 遍昭、恋一 よみ人しらず

これからも明らかなように、拾遺集迄の巻頭歌人には「よみ人しらず」が多く、後拾遺集以降では、そのほとんどが実名者で占められている現象である。

巻頭歌は、その巻の総序ともいうべきものであり、どのような歌を配するかは撰者にとっては大きな問題であるわけである。また、巻の初頭のイメージを強烈に打ち出す歌でもあり、全般的に観念的、客観的な歌が多いようだが、歌の文学性を充分発揮した名歌であることも事実である。

新古今集では、恋歌（一～五）の巻頭を飾る歌を、「よみ人しらず」の、

990よそにのみ見てややみなん葛城や高岡の山の峰の白雲

を置く、このように恋一の巻頭によみ人しらずの歌を置いた例は古今集にある。その巻頭歌は、

469郭公なくやさ月のあやめぐさあやめもしらぬこひもする哉

である。この歌は、つのる恋心をどうしたら良いのか、なすすべを知らぬといったあやめに託してよんだ初恋を詠じたものとして、恋一の巻頭に配置せしめたのであろう。「ほととぎす」に注目して、この歌の解釈には諸説[註3]あるが、

古今集のこの例に習ってか、新古今集でも恋一の巻頭をよみ人しらず歌を置く、古今集の配列を意識した様子が看取される。

巻頭に位置する「題しらず」歌は、巻の序としての役割を担った、詠歌事情に左右されない、歌独自の普遍性を持った歌で占められていることは言うまでもないだろう。それは後拾遺集以降では著名歌人の詠歌によっている事実からも理解できよう。

4　恋歌中の「題しらず」歌

一般的に、恋の「題しらず」歌は、私詠のときまたは独詠歌の場合などが主である。恋巻中の「題しらず」歌では、しばしばその解釈に問題を有するものがある。たとえば、拾遺集、恋二、710の権中納言敦忠の歌に、

あひ見てののちの心に比ぶれば昔はものも思はざりけり

とある。この歌は、拾遺抄の詞書には「はじめて女のもとにまかりて、またの朝につかはしける」とあり、「古今六帖」では「あした」の歌の中に入れているので、両者ともこの歌を後朝の歌とする。しかし、典拠になったと思われる西本願寺本「敦忠集」では「御厘殿の別当にしのびて通ふに、親聞きつけて制すと聞て」と親が許さなかった恋であるという詠歌事情を述べた詞書を付す。

すると、これらの詞書に従えば、何通りかの解釈ができそうである。拾遺集ではこれらの詞書を一切省いて「題しらず」とする。

撰者公任は、この敦忠の歌を後朝と解し、さらに後代になってこの歌の解釈の幅は更に漠然となってしまって、単にそれらの詠作事情を記述する必要性を感じなかった為かそれらを包み隠す「題しらず」と詞書せざるを得なかったのであろう。本歌は「百人一首」にもとられており、ここでも公任と同じ後朝の歌としている。

恋の「題しらず」歌には、このように詞書によってその歌の解釈の方向が示唆されるし、また撰者の受け止め方に問題があるようにも思われる。そのように、恋歌全体についていえば、恋歌中の「題しらず」には、あえて詞書に詠歌事情を記述しなくても良い歌と、その歌の解釈上にはぜひ詞書のほしい歌とに分けられる。

恋の経過によって、分類する恋歌の場合、四季歌等の場合と異なって詞書の表示には、類似性があるし、それらをどのように区別し記述して入集させるかは、撰者の解釈に他ならないであろう。詞書を除いて、他の詞書と区別すべく「題しらず」とした恋歌には、何らかの事情を有した歌が多いということは言えよう。

この他、八代集を通して好忠、和泉式部、相模らに「題しらず」歌が多い点、つまり、ある作者に限って登用する「題しらず」の問題や、同じ歌合、歌会、屏風歌詠を、区別して「題しらず」として入集する場合などにはどのような意味が在るのか等、細々に渡っては、疑問が多くある。単なる現象面の抽出に滞まらざるを得なかったようだが、これらの考察を踏まえて、また改に考え直したいと考えている。

まとめ

八代集における「題しらず」歌の変遷を、概略的ではあるが、各集に於ける特徴を把えながら述べてきた。古今集の古歌などにいう単なる作歌事情の不詳な際に付す「題しらず」は、徐々にその許容範囲を広げてゆき、公的記録性を意識した用語として、幾とおりかの解釈を示す結果になっている。

時代変遷の過渡期に編纂された古今集では、「題しらず、読み人しらず」が多く、これらの歌には古歌特有の万葉振りを示す歌が目立ち、また他方では撰者らは恋歌などの私事情な詞書は、意識して削除するなど、公的記録性の崩芽がこの詞書を通しても見受けられる。このような公的記録性は、後拾遺集あたりからしだいに強まり、新古今集に至っては、かなり意図された状況を表示している。

しかし、勅撰集とは言っても、一集一集にその時代の政治的な色彩や、編纂意識、編纂者等の違いがあり、詞書の問題にもこれらは投影され、各時代に沿って、歌の持つ文学性なども主張されているように思えてならないのである。

註1　佐藤高明氏「後撰和歌集の研究」参照

2　「後拾遺集「題しらず」歌の二、三の問題」（「文芸論叢」17号・昭56・3）

3　竹岡正夫氏「古今和歌集全評釈・下」に、本歌の評で「あやめも知らぬ」に注目して「毎日繁雑な田植えの仕事に追いまくられながら、その間、逢えないでずうっと恋い続けている、その鬱陶しく、ややこしく整理のできぬ恋の気持を表現したものとも解せる」とも述べておられ農民の歌謡を、その土俗性を洗い流してここに初恋の歌と解釈したと見ることもできようと推察される。